

慄してきつと齒ざしりをする。唇破れて血がにぢむ。「私が悪るかつたんです、貴君の御腹立も御無理とは思いません、政夫さん、勘忍して下さい」瀧の如き涙は彼女の面を傳う。「勘忍するもしないもないしやあありませんか、貴女の心で貴女がしたんですから一男の顔は恐ろしい程血の氣失せて居た。」

折から鐵舟寺の鐘が遠く田面を掠めて消えて行く、清水あたりは豆の様な燈が漸漸へつて行く。

「最う今更何んと云つても取かへしのつかん事ですからこんな愚痴は止めやう、其れに人に見られてもしたら、貴女の名譽にかゝりますから、いや人の妻に對して失禮申しました」けれどそんな事ないわ」と口の肉「どれ歸宅しやうか、然し僕は今夜眼も貴女とは會われぬか知れませんが」



と男は早立ち上らうとした、「ま、まつて下さい、まだお話ししたい事もございますから、どうぞ政夫さん政夫さんネ勘忍すると一言云つて下さい」とさすが語尾は亂れて居た「おはなしなさい僕を止めて如何するのです、僕の様者には何も用は無いはずです、お放しなさい」と云ふ「いえ放されません、私の云ふ事を少し聞いて下さい」と女は男の袂にすがりついた「えつ……」とふり放して男は早くも階段を早足に下りて行つた。

女は嗚咽の聲を漏して着物の砂を拂ひもせず、いつまでもそこに居た。

今回の照葉中の首位は確かに此篇である、最もいくらか「金色夜叉」の飾もあるが、眞似たと云つて替る程でもない。女も男も能く表はれて居り、筋にも文章にも無理は無い(選者評)

疑 惑

富山縣西 北山雪江 獨立野村

教會の説教が今終つたのと見える、老幼男女どやどやと門を出る、中に一人の婦人、「けれども何だよ……」と小首を傾けて、廣小路を西へくと歩いて行く、風は身を切る様に寒く、月は浮雲に覆はれて、今にも降らん雪模様である。

今迄考へ通しに考へた婦人は、

「何故再縁をしたら稗が穢れるといふのだらう？、再縁せずに居て、何かと空想に耽るよりは……」肩掛の中に首を埋めて、荒ぶ夜風に裳裾吹き拂はれるのを事ともせず、なほ西へくと歩を進めた。

宵の間の風は静まつて、月さへ物凄う冴へ渡り居るかと思ふと、又忽ち墨を流がした様に空は曇り曇るのである。

「ア、厭な晩だこと……」つぶやきながら戸を閉して内に入った、彼方の壁には亡父の肖像が懸つて居る、

此方の長押しには貞操の二字の扁額が、嚴に懸けられて有る。

「此扁額の二字は自分が撰んだのではないか、自分が撰んだ貞操に對して、疑惑が起るのは何故であらうか、これを撰んだ時代の自分と、今の自分と何も異つては居ない筈である、勿論借老同穴を契つた吾夫は今世に居まらぬ、けれども自分は……」

更けるに連て夜は益々寒くなつて来て、今は雪さへ降り積つた、婦人は其夜は終に一睡もせず何事か考へ明した様子であつた。

再縁——貞操——疑惑、殊に戦後の婦人界には多き起るべき問題で、疑ひは疑ひを生じ、今の婦人に自覺せしむるべく、餘りに荷が重すぎるので、此篇の主人公の如く、只擲詞するに止まる(選者評)

秀逸

小松原

岩代 服部すむせん子

「俊夫様！」

小松の影の處々に思ひに瘦せし身の影を、細長う交へてそぞろ歩きの俊夫が後に、美しきさはれ密かの呼聲捕ひ得ざりし想より我に回て振り向く俊夫が傍にそと走せ寄つた色白の人。小豆色矢飛白の袴一つに、水淺

黄色の帯を、俗かな背に少さくびつたりと結んで、眞白き襟のさて品も宜う。

「千賀さんでしたか」

俊夫は隠せたる其顔に、大人な氣もなく紅葉を散らし、大島紬の丈長き羽織の肩を張らして、兩手を白の兵古帯の間に差し込んで、うつむき見る芝生の上に夜露重げの紫菀一もと。無言に立ち止まれば、千賀子も無言に、其福々しき手に摘みあげてそと接吻つ。

「あの俊夫様……奥様を可愛がつてあげて下さいまし」と當突に、語尾をやゝさつぱりと言ひ出でた。驚き顔に、俊夫は千賀子の顔を見入つてまた差しうつむいた。

「私、突然にこんな事申上げて……でも何かから先に申上げて宜いのやらわからないのです……」

「私存じて居りますの、貴君が奥様にお辛らくなさるのを……毎朝婆やさんに同つて能く存じて居ります。お可哀そうぢやありませんか御容子と言ひお心立てと言ひ是と言つてお悪くい處の無いあの秋子様を、どうして彼んなに冷淡になさるんでせうつて婆やさんがいつも私に口説くのでございます。それは貴君がお心に召さなかつたのを何したの存じて居りますすけれ

晴らして下さるのは貴君のお心一つでございます、貴君がお優しくなさる、それ一つで御座います」

「俊夫様！ 貴君のお心は私能く存じて居ります！ 後れ毛諸共、白きハンカチを噛みめて月に立つ影のやがて俄彼と芝生に伏して。

「私もお慕ひ申して居りました！」

「えつ！ 千賀さん……」
松並木を通る馬の鈴月に冴えて、誰が流しゆくか寂しの歌。

君と別れて松原ゆけば……
松の露やら涙やら……

遠き野寺の鐘の響消えて、月白し。
「俊夫様！ 奥様を可愛がつてあげて下さいまし！」

例に依つて過者なもの、殆んど隙間はない、此人、作家たらん志あらば、今より努めて修養せよ、只輕々に筆を弄んで、自らの才に驅られつゝあるは、惜むべき次第であらう(選者評)

柳の門



春の川 (外選) 神田村地つ子

ど……俊夫様女と言ふものは弱いのてでございますよ、一生を頼む夫に素氣なくされちやあ……まあ秋子様のお心はどんなてせう……俊夫様！ 何卒可愛がつてあげて下さいまし」

「私何もこんな事を、貴君に申上げずとも……と思ひなさるでせうけれど私、秋子様が可哀そうてお可哀そうてこんな差出がましい事を申上げるので御座います。またそうして戴かなければ私の爲にも……」

「俊夫様……實は私はあの桑原さんから疑はれて居るので御座います……」

「えり」と口惜し氣に唇を噛む千賀子の白き面を、愕然俊夫は見入つた。

「いゝ親御さんの情として決してお無理ではございませぬ。私の宅は貴君のお隣り、常に足繁く出入りをして居るのであります……それに貴君が秋子様に冷淡になされば……」

「私は決して怒りませんし怨みもいたしません、口惜しうは御座いますけれど私は潔白なことは神様がご存じて居らつしやいますもの……たゞ私の身の疑ひを

上

お姉さん久瀬と主人正左が言へば、差對に坐りし姉のお大、好き程に挨拶済して、正様、お前様未だ御存じないか、私はちらと聞込んだが、お網様が近くに來て居なさるとの事ぢやの、と言へば、正左驚きの目を睨りて、絹めが、左様でござりまするか、而して何處に居りますか、と忽諸ならぬやうに膝を乗出す。お大苦き顔して、吹

管を膝に支いて、お前様お逢ひなさる意かいと、眞向より切込めば、主人面を正し、正左も男でござりますれば、那麽不届な眞似して、遠國へ走つたやうな女に

微塵も未練は残りませぬば、逢ひたいとも見たいとも存じませぬ。唯念の爲にお聞き申したばかり、然ればこそ戀しがる

娘にさへ、那麽者を母と思ふが最期父の子ではないぞ、母は亡き人と諦らめて名も言ふな、逢ひたいと思ふまいぞ、と固く吩咐けてあります。お訊ね申すが悪くは伺はなくとも差支ござりませぬ。と膠もなく言ふに、お大おほきに狼狽て、お前様那麽に眞劍にお成り